

ブラームスの室内楽

ピアノ四重奏曲 第2番

ブラームスの室内楽曲のなかでも屈指の規模を誇る。第1番と並行して書かれたが、本作は明るい曲調を特徴としている。第1楽章はソナタ形式のアレグロ。ラッパ信号のようなリズムカルな音型でピアノが歌い始める。弦の伴奏にのって雄渾な第2主題を弾くのもピアノだ。起伏が大きく、濃淡の激しい展開部が続く。第2楽章はロンド形式のアダージョ。弱音器をつけた弦楽器とピアノによる2つの旋律が美しく絡み合う。弦のように独り言をいうチェロをピアノが威圧すると、メロディの饗宴が始まる。まるで連作歌曲を聴いているようだ。悲恋の嘆き歌、舞踏会のワルツの調べ、清冽な賛歌……全てが主題の変奏による。痛切に高揚したのち、弦のように終わる。第3楽章はアレグロの長大なスケルツォ。スケルツォ部、トリオ部それぞれが展開部を持つソナタ形式で書かれている。まず弦楽器、ピアノそれぞれがテーマを奏でる。どちらも穏やかだが、展開部では激しく昂ぶる。トリオでは堂々とした重々しい踊りと、鄙びた歌がカノン風に絡み合う。第4楽章はロンド・ソナタ形式のアレグロ。この約7年後、「スラヴ舞曲集」を出版して大ヒットを飛ばすブラームスの面目躍如たる楽章で、活気に満ちたハンガリー風のメロディが駆け回る。最後はピアノと弦楽器が競り合うようにロンド主題を奏でて勇壮に曲を閉じる。

ピアノ五重奏曲

ブラームス唯一のピアノ五重奏曲で、30代前半の作品。まず1862年に2つのチェロを擁する「弦楽五重奏曲」として生まれた本作は、推敲魔だったブラームスにより、「2台のピアノのためのソナタ」への書き換えも含め、試演や改作を繰り返し、最終的に「ピアノ五重奏曲」として1864年に完成。こうした苦心の成果にもかかわらず、その痕跡は少しも見られず、あふれるほどの叙情のなかに若々しい情熱がみなぎっている。第1楽章はソナタ形式。冒頭のピアノと第1ヴァイオリンとチェロとのユニゾンで奏される第1主題から激しく心を揺さぶられる。短調のまま色合いを変えて奏される第2主題もほの暗い情感を含んでおり、劇的な高まりと美しい叙情とが絶妙に絡み合い、充実した楽章を形づくる。第2楽章は三部形式。一転して穏やかな雰囲気になるが、落ち着いた暗さを保っている。第3楽章は三部形式のスケルツォで、変化に富む楽章。緊迫した雰囲気から輝かしい強奏に至る波が重なり合い、穏和な中間部とのコントラストを際立たせる。第4楽章は、序奏付きのロンド形式。序奏は神秘的な雰囲気に満ちている。続く主部は民謡風のリズムカルな主題旋律で、最後は素朴な喜びを謳歌するかのように盛り上がって曲を締めくくる。